

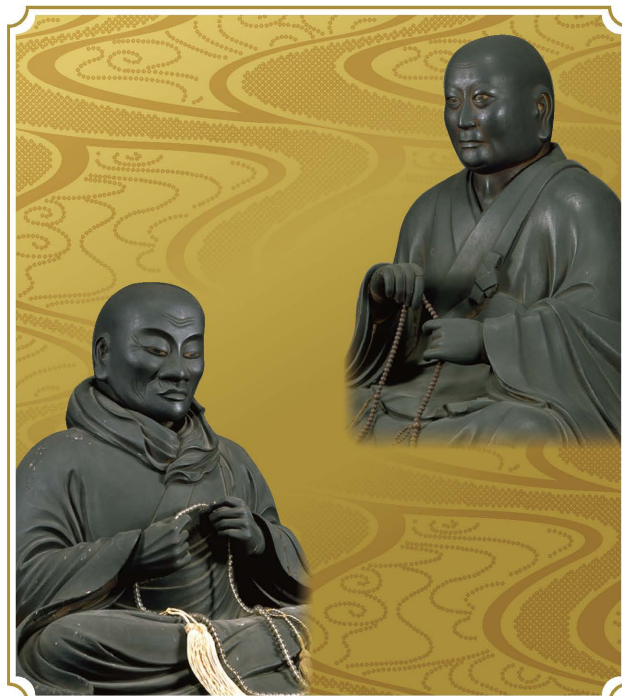
きょうさんほうえ
慶讃法会

なおし

七

大悲に 生きる

本山
佛光寺



親鸞聖人と法然上人(右上)

撮影：藤森 武



本山佛光寺

〒600-8084 京都市下京区新開町 397
Tel.075-341-3321 / Fax.075-341-3120

<http://www.bukkoji.or.jp/>

慶讃法会基本理念

大悲に生きる人とあう 願いに生きる人となる

2023年(令和5年)、本山佛光寺は、慶讃法会として宗祖親鸞聖人御誕生850年、立教開宗800年、聖徳太子1400回忌に併せ、第33代真覚門主伝灯奉告法要をお勤めします。

私たちの生活は、人工知能(AI)をはじめとするテクノロジーの発展により、想像もつかないほど便利になりました。

ところが、相変わらず心の平安は得られず、生きている意味を見失い、生かされている事実を忘れ、傷つけあっていることさえも気づかず、互いに孤立を深めています。

世の中が移り変わり、どのような境遇にあっても、阿弥陀さまの大悲のお心に生きられた親鸞さま。そのおすがたに流れるお心を、自らの願いとして生き抜かれたのが私たちの先人であり、今の私に届いている南無阿弥陀仏の歴史であります。

それは、思いを超えたはかり知れない命との出会いであり、その命の願いに生きることが、苦悩の中を生きる力となるのです。

時と処を超えて、人から人へと伝わるともしびを、「大悲に生きる人とあう 願いに生きる人となる」と掲げ、このたびの法要をご縁に歩んでまいりましょう。

◎ 荒れた学校

わたしが中学校の新米教員だったころの話です。

その中学校は、荒れていることで有名でした。地域の産業が衰退^{すいたい}して、苦しい家庭が多かったようです。子どもたちは家の状況や親の姿にとても敏感です。さびしさやストレスがあると、家以外で発散することもあります。学校の廊下の腰板^{こしいた}が蹴^けられて穴^あが空いたり、いじめやけんかが毎日起こったりします。教員は生活指導で手いっぱいです。

◎ ばばちゃん先生のおにぎり

この学校に、生徒たちから「ばばちゃん」と呼ばれて慕われている、小柄な年配の先生がいました。女性の体育の先生で、いつも「一二三」しています。荒れた生徒たちも安心して寄ってきますが、普段やさしいだけに、たまに真顔^{まがお}で叱^{しか}られるとしゅんとします。

先生は毎朝早い時間に出勤していました。しばらくはくするよと、ひとりの女子生徒が職員室に現れます。髪^{かみ}を脱色したツッパリ生徒です。先生は笑顔で彼女を机のわきに座らせると、バッグから二人分のおにぎりを取り出し、いっしょに食べ始めます。彼女の話をうなずきながら、ゆっくりと聞きます。

母子家庭というひとでしたが、毎日続くので先生に「あの生徒だけとっひのは、ひいきになりませんか？」と尋^{たず}ねたことがありました。すると先生は「そうだねえ」と少し悲しげにほほ笑^えみだけでした。生徒の茶髪^{ちやばつ}

の指導もしないので、わたしは先生に少し不満でしたが、大先輩でしたので黙っていました。

◎ 寄り添う人

ある放課後、ばばちゃん先生があの生徒を抱きしめて、ゆっくりと背中をなでていました。生徒といっしょに先生も泣いているようでした。何が起ったのか後で聞いてみると、生徒のお母さんが長い入院の末、亡くなったことでした。

「何にもできないよねえ」と先生は真っ赤な目で、彼女の家に出かけて行きました。

先生を見送りながら、幼い中学生の彼女にとって毎朝おにぎりを食べながら、先生と話をする時間がどれだけかけがえのないものだったのか、深い感動の中で気づかされました。

自分の未熟さに恥ずかしくなると同時に、生徒といっしょに喜び、悩み、歩んでいる先生は、わたしの目標になりました。

何十年経った今でも、生徒の悲しみに静かに寄り添^そっていた、ばばちゃん先生の姿が思い出されます。

「共に生きる」という言葉がよく使われますが、それは大げさなことをすることではなく、目の前にいるひとりの人の思いに、静かに寄り添^そっていくことなのだ、今も教えられるのです。